

オオスナモグリは生きていた

千葉県立中央博物館動物学研究科長 駒井智幸

論文：Komai, T., Yokooka, H., Henmi, Y. & Itani, G. 2019. A new genus for “*Neocallichirus*” *grandis* Karasawa & Goda, 1996, a ghost shrimp species (Decapoda: Axiidea: Callianassidae) heretofore known only by fossil materials. *Zootaxa* 4604(3): 461–481.



図1. オオスナモグリの産地。▲：現生標本の採集場所。●：化石の産出地。



図2. 現生標本の採集された静岡県沼津市陰野川河口。撮影：横岡博之。



図3. 現生標本の採集された高知県土佐市宇佐町。撮影：伊谷行。



図4. オオスナモグリ *Laticallichirus grandis*. 現生標本、沼津市陰野川河口産。千葉県立中央博物館所蔵。

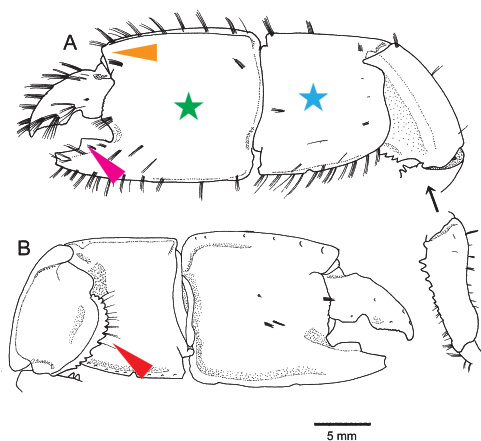


図5. オオスナモグリ *Laticallichirus grandis*. 現生標本の大鉗脚。沼津市陰野川河口産。千葉県立中央博物館所蔵。

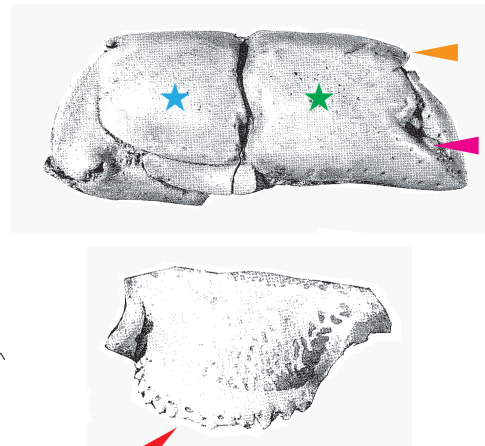


図6. 上、オオスナモグリのホロタイプ；下、同、パラタイプ (Karasawa & Goda 1996)。

研究の背景

スナモグリ類は十脚目アナエビ下目に属する甲殻類で、干潟や砂泥底に深い巣穴を掘って生活している種がたくさんいます。種類によっては1メートルを超える深さの巣穴を作ります。「ばけじゃこ」などと称して釣餌とされるので、釣りをする方はよくご存知なのではないでしょうか。体の甲らは柔らかく、フニャフニャしているのですが、ハサミ脚は炭酸カルシウムをたくさん含んでいてとても硬いので、保存状態のよい化石がよく見つかります。今回発見されたオオスナモグリは、これまで千葉県を含む関東地方～沖縄本島におよぶ中期更新世～完新世（100 万年前以降）から産出する化石および遺骸だけが知られているだけで、絶滅種ではないかと考えられていました。

研究の経緯

今回の論文の著者である駒井、横岡、邊見（京都大フィールド科学教育研究センター）、伊谷（高知大教育学部）はそれぞれ、ヤビーポンプという吸引式の採集器具を用いて、日本各地の干潟や砂浜で調査を実施し、どのような種類のエビ・カニが生息しているのかを継続的に調査してきました。第2著者の横岡は、2017年3月に静岡県沼津市の陰野川河口の干潟で、大型の見慣れないスナモグリを採集し、駒井に同定を依頼しました。さらに、邊見と伊谷も高知県土佐市で同種であると思われるスナモグリを採集していたことが分かり、併せて駒井の方で分類学的な検討を行いました。詳しく調べたところ、これまでに知られていたスナモグリ類の属に該当せず、さらに現生の既知種にも該当しないということで、最初は新属新種を報告する論文としてまとめられました。しかし、審査の過程で、化石種とも比較した方がよいという指摘があり、再検討したところ、オオスナモグリのホロタイプや他の化石と鉗脚の形態がピッタリ一致することが分かりました。化石・遺骸の産出年代と分布域を併せて考慮し、最終的に現生標本はオオスナモグリに同定されました。属については、最近の文献では *Grynaminna* に帰属されていたのですが、化石や遺骸では残らない様々な形質を検討した結果、既知の属には該当するものがなく、新属 *Laticallichirus* を提唱しました。形態と併せて、ミトコンドリア DNA の 16S rRNA 遺伝子の部分配列も決定し、分子系統解析を実施したところ、やはり既知の属には該当するものがなく、新属の創設は支持される結果となりました。

研究の意義

今回の研究は新属の記載という分類学的・系統学的な興味もありますが、なんといっても比較的最近絶滅したのでは、と考えられていた生物が現存していることがわかったということに大きな意義があります。内在性生物は採集が非常に難しいのですが、ヤビーポンプの使用により、潮間帯から潮下帯上部に生息する種類については最近になって情報が増えています。しかし、潜水しなければアクセスできない潮下帯下部ではいまだに調査が困難であり、オオスナモグリの主な生息域はこのような場所にあり、そのことがこれまで標本の採集ができなかったことの要因の一つではないかと考えています。千葉県でも、化石は見つかっているのですが、現生標本はまだ採れていません。館山市あたりで見つからないかな、と密かに期待しています。